

多角化経営で未来を切り開く

三重化学工業株式会社



会社外観

企業概要

代表取締役

山川 大輔氏



所在地 三重県松阪市大口町262番地
TEL:0598-51-2361 FAX:0598-51-1143

設立 1956年(昭和31年)11月

資本金 2,300万円

従業員数 55人(パート含む、2020年8月現在)

事業内容 作業用手袋、保冷剤・保冷具、医療・介護用具、
作業保護用品の開発・製造・販売

URL <http://www.miekagaku.co.jp/>

様々な環境変化に対応できる、
しなやかな強さを持ったレジリエントカンパニーへ

洗濯のり製造・ 販売からの始まり

三重化学工業株式会社は、山川大輔社長の祖父・善高氏が1956年に化学洗剤・タール石鹼の製造メーカーとして創業。57年より家庭用洗濯のりの製造販売を始めたが需要の減少等により、66年から洗濯のりの原料や製造ノウハウを活用し、保冷剤や氷枕の製造に乗り出した。

当時、保冷剤はあまり利用されていなかった。そこで弁当やケーキの持ち帰り用から精肉、魚介類の配送用まで、どのようなニーズにも対応できる「スノーパック」を開発。今ではよく目にする、お刺身などに添えるミニサイズの保冷剤は、同社が初めて販売した製品である。

事業は順調に拡大していたが、保冷剤・氷枕は夏場中心の製品で、冬場に売上が落ち込むという課題があった。そこで冬季の受注を確保しようと70年より、



作業風景

作業用手袋の製造を開始する。これまでと全く異なる市場の開拓は、容易ではなかったが、業界初の防寒機能を備えた作業用手袋「ミエローブ」を開発した。今では保冷剤の製造・販売、保冷具のOEM生産と並ぶ、事業の柱となっている。

第4の柱事業・ 医療分野への参入

更なる事業拡大を図るための取組みとして、05年に、医療機器の製造業・製造販売業の許可を

ぶるキュア 知事報告



保冷剤作り体験



仕事見学



作業風景

取得、産学官民が連携する県の事業「みえメディカルバレープロジェクト」の参加を通じて、医療分野へ本格的に参入した。

06年には、リハビリ用温熱パック「ホットパック・mie」の製造・販売を開始。創業60年間で培った保冷・保温の技術を活かし、満を持して発表した製品だったが、新規市場での販路開拓には苦戦し、6、7年は厳しい状況が続いたという。

それでも、医療分野を作業用手袋、保冷剤、保冷具のOEMに次ぐ、第4の柱事業にしたい、との社長の強い思いがあった。

縮することに成功した。

また、同社の優れた技術力により、発注者のニーズを忠実かつ早期に製品化していることから、

BtoB企業にも「知名度」を

社長は、25歳で同社に入社。生産部門、営業部門、開発部門と事業に係る全ての業務を経験し、15年、3代目の叔父・覚氏の後を継ぎ、社長に就任した。

「当社のようなBtoBを主とした中小企業の弱みは、優れた製品や技術があっても、知名度の低さから、なかなか販路や受注が確保できないことにある。それではダメ」との考えから、社長就任時から、「三重化学工業」を知ってもらうため、自社の「ブランディング」を意識してきた。

苦戦をしていた医療分野においても、同社の存在感を高めるために、新製品の開発サイクルを早め、「アイシングフィットG」や「くるっとクール」等の製品を続々と発表し、製品ラインナップを広げた。また、17年には、医療分野への参入10年を期に、医療機器ブランド「Median(メディアアン)」を立ち上げることで、医療分野における三重化学工業の姿勢を明確に打ち出した。

販路をも確実に確保できる状況にあることもメリットとなっている。

一例として、藤田医科大学と共同開発した「くるっとクール」は、「頭以外の患部にフィットして、冷やせるものがほしい」という看護師の生の声を受けて製品化されている。そのため、同じニーズのある、他の病院や老人保健施設からの受注も伸ばしている。

創業当時から多角化経営の精神

洗濯のりから保冷剤、氷枕をはじめとする保冷具、作業用手袋、そして、医療分野への参入と、時代の需要や自社の課題に対応し、事業を展開してきた同社。新規事業へ積極的に取り組む姿勢について、「創業者の時代から事業を多角化していくDNAがあった。それは現在も受け継がれており、当社の社風」と社長は語る。

また、「事業の多角化は、一番のリスクヘッジであり、我々が目指す「レジリエントカンパニー」、つまり、しなやかな強さを持った会社

あわせて、本社社屋の外壁一面に主力製品の「ミエロブ」をイメージした手袋をペイントしたり、名刺やパンフレット、HPを刷新したほか、社長自らが数多くのメディアに出演し、「三重の松阪に、こんな面白い製品や取組みをしている企業がある」ことを外部へ発信し続けた。

これら「ブランディング」の成果により、製品の発注問合せ、OEMの依頼が増加したほか、医療分野での新しい取り組みが評価され、18年には経済産業省の「地域未来牽引企業」にも選ばれるなど、医療分野を第4の柱事業として、軌道に乗せた。

更に、業界を問わず、同社製品を見た企業から、共同開発の相談や依頼を受けており、近年では毎年100アイテム以上の新製品を製造・販売するに至っている。直近では、衣料ブランドで大手セレクトショップの「BEAMS JAPAN」とコラボし、スポーツの時に使用できる冷却剤「筒冷却材SP」の開発なども行っている。

を目指していくために、必要な行動。今後も常に新たな取組みを続けるため、新規事業のタネを数多く蒔いています」といきいきと語る。

更なる多角化へ「ミエラボ」

医療分野など新分野への参入を図ってきた同社だが、「これまでの事業は横展開。全く新しい製品を世の中に出すことが今後の目標」と次を見据える。

今年7月には、MIE CHEMICAL INDUSTRY LABORATORY「ミエラボ」を立ち上げた。「ミエラボ」は、既存事業の技術や製品にとらわれず、ゼロベースで、ものづくりに取り組み、新しい「発見」を生み出す場所だ。「世の中にまだない、面白い製品やアイデアを創っていく場所として、様々な企業や



様々な「連携」によるスピード感

「ブランディング」と同様に、社長が大切にしていることが「連携」だ。更なる新商品の開発を進めていきたい思いの傍らで、顧客ニーズのトレンド把握が課題となっていた。次から次へと目まぐるしく変化する現代において、「自社で二からニーズ把握をし、製品アイデアの構想を立て、開発していたのでは、スピードが遅すぎる」と社長は言う。

そこで、ニーズを持つ企業や大学等の研究機関へ積極的に働きかけ、協働で新しいモノを創っていくことで、製品化への時間を短

大学等の研究機関とコラボレーションをしていきたい」と語る。

様々な製品を創造し続ける同社が、今後どのようなユニークな製品を世に出していくのか、楽しみにみである。

文＝調査グループ 服部諒

支店より一言

私は約25年前にも同社の担当をさせて頂いておりました。長年培った技術を活かし、世の中のあるあらゆる場面で役立つモノを提供されてみえます。

昨今、コロナウイルス感染症の対策としてマスクは必須である中、世間に先駆け「保冷剤付きマスク」を開発する等、同社の開発力・スピード感には感心させられます。今後も世の中のために、便利で役立つ「守る」を提供して頂くことを期待しております。



百五銀行 松阪支店長
みえろぶ 水戸路 尉行